# ながの農業委員会だより

昭和60年1月15日 〔第30号〕
編集発行 長野市農業委員会
TEL 26—4911 内線 393

## おもな記事

ページ
(2)農家の記帳制度
(3)年金証書の交付方法変る

## 年新賀謹 1985

### 長野市長 柳原正之

長野市はお陰様で県都として年々発展を続け人口も三十三万人を突破しましたが、そのうち農家の占める割合は約二〇%と高いウェイトを占めております。

今後共、都市と農村とが調和のとれた型でますます発展出来る事を期待するものであります。

農業は今国際化の波が押し寄せ、国内的にも産地間競走が激しくなるなど、大変な時期を迎えておりますが、国民の食糧を供給し、自給率の向上を図らなければならない時だけに一層その役割は重要となっております。

しかし最近は消費者ニーズの変化などにより、生産者側も漫然と過している訳にいかなくなりました。

これらを克服するため、仲間が、地域がより話し合い、研究を通じて生産性を追求していかなければと思います。

行政としましても一層生産基盤の整備を始め、農村環境の改善を図るため努力していく考えであります。

### 農業委員会長 中村正一

年頭にあたり今年こそ農家にとって良い年でありたいと願わずにおられません。

昨年は古老も知らない豪雪によって春のスタートが半月以上も遅れ、どうなることかと心配させましたが幸い災害は少なく、夏以降の好天—農作物によっては干ばつ被害発生—によって稲作だけは五年振りの豊作をみました事は暗夜の光明でありました。

しかし野菜など、豊作貧乏になったものも多く、農業のむづかしさを痛感するものであります。

ご承知のように農業の基盤は農地です。しかし今、市内に遊休荒廃農地が四〜五百㌶にも上り、又都市化の進展によって年々九十㌶近くも農地がつぶれ、今後予想される大型事業などによって一層進むものと思われます。

農地は私達の先祖が幾多の苦難をのり越え、拓き、育てて来た財産でありますので有効に利用しなければと思います。これらの事を柱に農業委員会は皆様の利益代表機関として今年も共に誠意をつくしたいと思います。

## 土に生きる ⑩

### 青木さんのプロフィル

松代町清野 青木定昭

青木さんは、高校卒業後、家業の農業をつぎ今年で七年目となります。

青木さんの家は、長芋の百五十aの作付を中心にして、夏秋キュウリを十七a、春レタス十七aの農業経営をしております。

家族は祖母と父母に妹の五人家族で、農業は妹以外の四人んで取り組む、専業農家であり、松代岩野でも大きい規模の経営をされている農家です。

古い時代の長芋づくりは、冬の寒い気節にスコップで一本、一本掘り取る手作業でしたが、その後トレンチャーが開発され掘り取りが楽になったと思ったら、バックホーで掘り取るようになりました。

バックホーで長芋を掘るなんて、とても考えられませんでしたが、使ってみると、とても具合が良いようです。

長芋づくりは手作業による部分が多く、植付時には十a三千本の種芋を手でならべ、支柱を千五百本立て、掘り取る前にまた、千五百本の支柱を一本、一本手で抜きとらなければなりません。

これらが手のかかるところです。

長芋は松代の特産物となっていますが、近年は各地で作付されるようになり、価格が不安定となり、いま一番望まれるのは販売価格の安定ですと、青木さんは話しています。